

# バンコク会合の 総括

タイ チュラロンコン大学  
法学部 教授

ウイティット・  
ムンタボーン



ウイティット教授による  
ワークショップのまとめ。

2006年2月14日に開催されたバンコク会合で総合司会を務めたウイティット・ムンタボーン教授(タイ、チュラロンコン大学)は、今回のイベントはこのうえなく知的なものであり、人道行動の「技」を目の当たりにすることができたとの結論を述べた。以下に紹介するのは、キャンパスに描かれた10の「筆跡」として取り上げられたものである。ウイティット教授は非常に多くの比喩を交えながらメッセージを伝えようとしたので、(録音はされていなかったが)ここではできるかぎり教授自身の表現に忠実であるように努めた。

## ポイント1 (料理法)

人道行動に関する日本流のレシピは存在するか? イエスと言う人もいるだろうし、非常に曖昧な答えしか返ってこないかもしれない。質問のしかたを変えてみよう—人道行動について日本が提供できるレシピはあるだろうか? 答えはもちろん、イエスである。

その材料は日本の歴史から得ることができるだろう。非常に多くの天災、第2次世界大戦後の平和構築、1970年代の英知の共有、ボトムアップ・アプローチをもたらしたタイの日本人ボランティア…日本は多くの教訓を得てきたのである。

## ポイント2 (食事)

日本には数種類の「食事」がある。緊急援助、切れ目のない援助、強化されたパートナーシップ、政府間機関などである。日本の人道援助ワーカーは現地住民からのインプットに配慮している。しかし、人道的解決は人道行動以外の行動に左右されるのも事実である。外交政策の文脈を踏まえながら、人道援助について現実的な見方をとらなければならない。

## ポイント3 (空腹)

「欠乏からの自由」と「恐怖からの自由」は第一の課題である。コミュニティ構築に対する人間中心アプローチも鍵となる。援助対象となる難民は、紛争に関わって傷つきやすい立場に置かれた集団でなければならない。個人の保護についても国際的保護についても「人間の顔」をした対応を実践していく必要がある。より重要なのは、活動は現場で、効果的な草の根組織を通じて行なわれなければならないということである。人間の安全保障と人権との関係も考慮されなければならない。

UNHCRは、平和構築にもっと注意を向けるよう長年にわたって提唱してきた。緒方高等弁務官(当時)は、2000年、国連安全保障理事会に対し、「さまざまなレベルでの平和構築に向けた迅速かつ包括的な努力」を求めた。人間の安全保障諮問委員会の出現により、このイニシアチブは実行に移されつつある。

人道行動においてだれがアジアの立場を代弁するのか? 日本は何をもたらすことができるか—共感、情熱、現地住民の尊重、勤勉、共存か?

## ポイント4 (のどの渇き)

保護と援助は「のどの渇き」である。日本が「保護」に与えることのできる付加価値は何か—保護の原則と予防の重視か? 「援助」についてはどうか—オーナーシップの共有、現地住民の参加、相互扶助、持続可能性か? 日本は、国連についての考えをもっと具体的な言葉で展開する必要があるかもしれない。

## ポイント5 (食前酒)

日本は、平和を保ち、平和に貢献する生活を送ってきた。政府による支援だけではなく、NGOも(たとえば1990年代のルワンダやボスニアで)貢献を行ってきたのである。1970年代、80年代および90年代の萌芽期に日本が人道行動にどのように関わってきたかを明らかにするうえで、歴史的視点が有効な役割を果たす。いまや、人道行動への関与は日本の外交政策にしっかりと組み込まれるに至った。日本は自信を持って人道行動に携わるようになったのである。

## ポイント6 (ディナー)

受益者は「主体」である。雇用と教育を拡大し、受益者のためにより多くの機会を生み出さなければならない。ノン・ルフルマンというのは非常に単純である—庇護希望者を押し返したりするな、そして受

益者を保護しろということにはかならない。日本はインドシナ難民を助けたいと考え、実際に1万1,000人の再定住を受け入れてきた。

より専門的に考えた場合、受益者のための対応と日本の人口動態上の課題とのバランスをとりたいと望むかもしれない。日本の産業界は人道行動に関心を持っており(たとえば津波に対する民間セクターの対応など)、UNHCRはそこまで信頼醸成の取り組みを拡大することもできよう。

## ポイント7 (食欲をそそる風味)

日本の援助はどのように受けとめられているのか? 日本は金持ちとして、あるいは顧客として見られているのだろうか? アジアの歴史的な文脈における日本の外交政策とはどのようなものだろうか(それは日本が選べるものなのだろうか)? 日本はタイに人道行動について教えることもできるのであり、私は日本が後見人であると考えている。

## ポイント8 (歓待の心)

日本が有する歓待の心はすべての者にとって利益となる。日本人ボランティアが、すでに1970年代からこの地域における平和と安全に貢献していたことが留意されるべきである。これは心強い事実であり、日本がボランティア活動を広げていくうえで役立つだろう。

## ポイント9 (次のコース)

現在、国際社会は国連改革のまっただなかにあり、そのキーワードは平和構築などの分野にある。人道危機への対応、民族融和、人権委員会や安保理の改革は、すべて日本に関わりのある課題である。

## ポイント10 (食後酒)

豊富に提供された「考えるためのネタ」を消化するために、みんな少々喉を潤おさなければならない。ご清聴に感謝する。